

Reading the Old *Jōruri* Play, *Atago no Honchi* (2)

KURUSHIMA Hajime

This is a study of the text of *Atago no Honchi*, a *jōruri* play published in the early modern period. It is the second part of “Reading the Old *Jōruri* Play *Atago no Honchi*,” which appeared in the previous issue of this Bulletin (No. 54, 2020). The original text used here can be found in *Kojōruri Shohon Shusei* 5 (Kadokawa Shoten, 1966), revised and edited by Yokoyama Shigeru. After reading the text and ascribing kanji to the phonetic text, we annotated it. Of the six-volume text, sections 4-6 are included here.

According to the play, after going to Mt. Atago, Nichira, a Baekje General, defeats the Tengu chieftain Zegaibō and the two then enjoy exchanging secret battle techniques. Nichira looks out over the country from Mt. Atago and counts the number of mountains where the Tengu reside, later known as *tengu zoro*. After returning to Namba he receives news that the King of Baekje has killed his wife and children. He fasts and declares that he will become Atago Gongen, the protector of the Holy Law and Buddhism. In front of Prince Shotoku and others who come to visit him, Mononobe no Moriya and Soga Umako engage in battle and Moriya is struck down. The death of Nichira is reported to Baekje, and an army rushes in. The Tengu led by Zegaibō, and Ikifudō of Baekje, join the fray, but the spirit of Nichira appears and subdues Fudō. Prince Shotoku enshrines Nichira as the tutelary god of Atago Jizō Gongen.

This work was thought to be a reflection of the belief in Atago held by mountain priests, but it is more of a creative work that features cleverness and dramatic battle scenes. It is also noteworthy for its relation to Atago worship in Edo, as this text is an authentic copy of the Edo version. A detailed analysis of the text reveals the dynamics of the rich tradition of tales from the medieval to the early modern period.

The contents of the annotations are an outcome of a reading group organized by the author at Kyoto Seika University as part of his research for a Postdoctoral fellowship begun in 2018 and sponsored by the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS).

古浄瑠璃「あたごの本地」を読む（完）

久留島 元 KURUSHIMA Hajime

本稿は、古浄瑠璃「あたごの本地」本文研究の端緒として本文の精読を目指し、本文に漢字を宛て、注釈を施したものである。全六段のうち四〜六段を掲載する。本文は横山重校訂『古浄瑠璃正本集成』五（角川書店、一九六六）を用いた。固有名詞には傍線——をふした。ここまでの梗概を示す。

一、聖徳太子の教育係として百済から日羅將軍が招かれる。月が二つ出たというので日羅が一つを射落とすと、白鬼となって自ら月の桂男を名乗る。首を打つと三足の兎となる。

二、日羅將軍を連れ帰るため百済から軍勢が来る。難波の浦で合戦となるが、日羅は百人をもって敵を退ける。

三、日羅は一度隠れるため愛宕山に登る。滝で龍に会ってこれを従えようと、女の姿となって成仏する。日羅は滝の上に水神宮を建てる。日羅がさらに登ると大猪が襲ってくる。日羅がそれに乗ると、猪は天竺のはくそん王の転生で、日羅を乗せた功德で成仏したと言う。たちまち雷電とどろき、天狗の火がともるが日羅の肩から光が発し鎮火する。大天狗があらわれ日羅と格闘、組み敷かれた大天狗は是害坊と名乗って降参し、守護を約束する。

第四段では天狗たちは日羅の眷属となり、秘術を応酬して親交を深め、さらに

諸国の天狗を列挙する「天狗揃」が始まる。

前稿で示したとおり^{*1}、アンヌ・マリ・ブッシュ氏はこの場面を山伏集団による験競べの暗示とするが、若月保雄氏の指摘するように機巧演出の見せ場だったと考えるのが自然であろう。「天狗揃」の趣向は、能『花月』、『鞍馬天狗』、古浄瑠璃『天狗の内裏』などに先行例があり、近世に成立した『天狗経』などの修験祭文とも関わる。また戦国時代末期成立の『月庵醉醒記』には「天狗住山之名所」と称する火難除けの呪言が記録され、根本中堂から始まる霊山が列挙される^{*2}。注釈では地鎮・宅鎮を担った「中下層の宗教者」による除災修法の天狗祭文が「少なくとも中世には溯り得るものであり、この月庵が書き留めたものは、記録されたものとしては最も古い例と言える」として天台系の山渡り祭文や修験道修法、お伽草子類にも目を配って宗教者の活動を想定しているが、実際の先後関係は定かでない。江戸時代に入ると絵本『天狗そろへ』^{*3}や今道念節「天狗そろへ」^{*4}として独立して受容された例もあり、庶民に身近な祭文という点から、芸能・文芸でも親しまれた趣向であつたらしい。

第五段で日羅は愛宕山に入定する。第六段では、日羅の死を聞いて再来した百済軍と日本軍、日本に加勢する天狗たちの合戦となり、百済の王子は国を守護する「生不動」と二童子を呼び寄せて天狗を制圧するが、愛宕権現となった日羅が出現し、不動を降伏させる。この結末は能『善界』において、不動明王や日本の神々が善界坊を退ける場面をふまえたものだろう。

注釈の内容は、筆者が二〇一八年度に採択された日本学術振興会特別研究員PDの研究課題「縁起・地誌・俳書をめぐる天狗説話の受容と展開」の一環として、京都精華大学において輪読会を主催した成果である。研究会には堤邦彦氏、橋本章彦氏、加美甲多氏、門脇大氏、八木智生氏らに参加していただいた。また、二〇一九年八月一八日には「今昔の会」において研究発表を行い、小峯和明氏、松本真輔氏らから助言を得た。あわせて感謝したい。

あたごの本地「目次」

- 一、大たうのせがいはう、日らとあらそふ事
- 一、天ぐ、岩をた、き水を出シ雪の山ニスル事
- 一、日ら亀ヲ二つ山にし、いせたんばのかめ山の事
- 一、天ぐ、くもにかけはしの事
- 一、日ら、はしのぎぼうしはじめ給ふ事
- 一、日ら、あさ日をみなみより出ス事
- 一、同あさ日山のゆらいの事
- 一、四方の名所見物、同天ぐそろへの事
- 一、日ら、天ぐ共ニしゆごせられ、いわや入之事
- 一、龍神、りうとうヲさ、け給ふ事
- 一、正とく太子、日らとわかれ給ふ事
- 一、りうぐうのあしゆら、日らへかせいの事
- 一、し、たる日ら、つかよりあらはる、事
- 一、いきふどう、こんがらせい高、かうさんの事
- 一、日ら、いぬをふどうのつかはしめ二渡事
- 一、日ら精軍、あたご大こんげんとあらはる、事
- 一、正とく太子、やしるこんりうの事
- 一、六月廿四日、こんげんみやうつりの事
- 一、ふどう、こんがらせい高、日本の神と成殊
- 一、あたごの補火ぶせの神と申ゆらいの事

四たんめ

其後、かくて日ら將くんは、天ぐ共をともとして、其よはみねにて、あかさる。
 御とき申、せがいはう、「よもすからのものがたりに、我等がひぎやうの有様を、
 御めにかけ申さん」とて、そばなる岩をはたどうてば、水にわかになき出て、
 たきのごとくにながれける、ふしきなりける有様也。
 日らも、きとく、みせんとて、こくうを、まねかせ給へは、いつく共なく、
 大がめ二つ、あらはれいで、ながる、水にまいあそぶ、天ぐは水を、たちまちに、
 雪の山と、なしにける。

日らも、山を出さんと、二つのかめをおつ取て、一つをきたへ、なけ給へは、
 俄に山とあらはれける、たんばのかめ山伊勢、是也ける、一つは南へ、なけ給ふ、
 いせのかめ山伊勢と申せしも、此時よりも申也。せがいはう重て、ましゆつの法にて、
 あうきたつくもに、はしをかけ申さんと、いふよりはやく、なかそらに、くも
 にかけはし、ありくとわたしたり。

日ら此由、御らんして、わたるものなく、さひしきに、出くほうしを、わたさ
 んと、人間しゆつしやうの、ほうを以、あらはれよとの給へは、小ほうし五人、
 はしの上にそ立にける、今の世の、はしのぎぼうしと云事も、此ほうしをまなぶ
 と也。か、る所へ、そこ共なく、千鳥あまたの小鳥共、をのかさまくさへすり
 て、はしの上なる小ほうしばらをそわらいける、日ら、かしましく思召、「その
 こはうしたち、かくれよ」との給へは、さへてはしにはなかりけり。それより
 はしも、くもまに入、ちとりもかすみに、とびさりける、さればにや、くもに
 かけはし、かすみに千鳥と、つたへしも、此時よりも申也。其外、天ぐの
 ひしゆつにて、いわにたをさかすれば、日らはかれ木に、花をさかせ(十一ウ)
 天ぐさん天狗をうみにすれば、日らはふねをうかめ給ふ、殊更はやわさ、
 ちからわさ、すこしもおとせたまはねば、せがいはうあまたの天ぐらも、
 「ぢんへんきとくの人や」とて、なをく日らを、らいはいし、よきにうやまひ
 申ける。すてにそのよも、はやあけ方にそなりにける、日ら、仰ける様は、
 「せがいはうのひじゆつにて、あさ日を南に出し申せ、せがいはう承り、「日月ほし
 の三光は、我等かじゆつにて、はかりかたし、日らの法力、つきせすは、みなみに
 いたさせ給へ」といへば、「それこそやすきぞみ也」と、東に向ひ手を合、「此
 日らを日の本のまもりの神となし給はば、けふの朝日、みなみより出させ給ひて、
 ませう共かうたがい、はらしたび給へ」と、かんたんくたき、いのらるれば、
 みなみの山南のこかげより、あさひ山朝日と申せしも、此あらそひより申也。
 の山は、うちの山、あさひ山朝日と申せしも、此あらそひより申也。
 さて見へわたる山々、つ、いて見ゆるうらうらに、しまく、さとく、
 おほけれど、そこをいづくくと、わきまはず、かたりてその名を聞すべし。せがいは
 此由承り、「出くおしへまいらせん」と、なを山ふかくそりける、日らは
 ゆんでに立給へは、せがいはうに立せい、したいくををしへける。
 「先右の方にみねたかく、しけりしもの見へけるは、あれこそよ、のうた人の

心をとめし、おくら山⁸、小国なれと日の本の、心はひろさはの池の玉もになみこゑて、ひかりたかをの、みねつ、き、とがのを⁹ちきを程ちかし。

北はたんばの大木の坂¹⁰、みなぎりをつるほうづがは¹¹、ながれのすへは白露の、おきふししげき、さ、山¹²に、ひかけやつ、く、くらかりの、とうけはるかにみへにける。

南は、なには入江にて、さん軒¹³には、なんばしま、わたなへ、かんざき、西のみや、衣はすてふあまがさき、うしほとなみとつれて行、引大もつうら¹⁴とかや

こなたに見ゆるは、さかいのはま、神も久しく、すみよしの、きしのひめまつ、いくよへん、みどりの空も、あをやぎの¹⁵ (十一才) [挿絵 第九図] (十二ウ) [挿

絵 第十図] (十三才)
たれをしのぶや、しのだのもり¹⁵、ひやうこのうらをみなと川¹⁶、すまやあかしの、うらつ、き、なみのあわちのしまかけに、月おちかゝる、おもしろや。

こ、までおとは、きこへねと、なるとおきも、をの見ゆる、いりへくくのあしのはに、つなきとめたる、もかりふね、ゑんほのきはんとながめあり。西はかいしやう、まんく¹⁷と、なみの花たつ、おもしろや、東には、あみだかみね¹⁷、こなたに高き、ひゑいざん、ひらのたけまで、ほの見ゆる。」

日らはゑつきかぎりなく、「さて日の本の、天くのみか、どこくそ」
ぜかいて「我は、いこくの者なれと、あまねく存候。まづ、らくやうの、きたにあたつて、くらまさん¹⁸、日ら聞給ひ、「それはま事に、大ひたもんでんの、すみか所、天くのなはいかに」、ぜかい聞給ひ、「されは候、ませうのうちの大

こうしやう¹⁹、是は、みのりのにわを、さまたくる、大きやうまんのいかきのそう」日らからくと、打うなつき、「尤なり、さてもろこしまでも、かくれなき、みくまのなちのたき、めうわうさん²⁰にたかすむそ」、ぜかい聞て、「是は日本

大いち、大りやうごんけん²¹の、つかはしめ、むらくもいん²²か、すみ候。」
日らくわんくと、ゑとく有、「其むら天くか、ひきやう²³のわざはいかに」、

ぜかい聞、「その事候、てりてつたるあをそら、にわかにくこうん、たなひかせ、しんとう、いなつま、きりをふらする、ひしゆつたつしや、扱こそ、むらくもいんとは、なつてたり」

「さて其外の山くましましやうのすみかは、とこくそ。」先つくしには、

ひこ山²⁴、つ、くあいせん、そまかたけ、大とり山²⁵に、ちやまん天く、むらくもほう、雨をよこきるつちかせほう、四国へ、わたりて、白みね、高みね

の、き々の森、太郎天く、二郎天く、いつなの三郎、さがみ坊、あはちに、むろ山、おにかさき、きしうにやけ山²⁶、みたらいさん、くらまに、日りんほう、

いつみ河内に、みねのとう、たにのとう、こんがうせんに、お、かめ山、人の智を、く(十三ウ)らまかす、こんがういんの、あくま坊。大みね、かつらき、しやがだけ、是そ、日本大ませう、ちとう、やくおう、せんき坊、

ひらや、よ川、いぶきがだけ、はうきに大せん、いぬこし山、あつまや天く、きやうまん坊、しなのにあきま、木のはがくし、かすみ坊、雨をふらせば、風をたて、あ、おするがの、ふじ太郎。かかに白山、のどにゆつるぎ、ゑつ中に立

山、てわにはくろさん、かうぼう天く小天く、このは天くに至迄、高き御山、あたごさんにとびうつり、日らをしゆごし申さん」
とすみかへ、とびされは、日らなんばへ、帰らるゝ、ま事にきたいの、ほうへんやと、みなかんせぬものこそなかりけり

五たんめ
其後、かくて日ら将軍は、なんばのやかたに入給ふ、かゝる所へ、はくさいの、

みたひ子共に、つけ置たる、しゆふ²⁷、なんばへ参つ、日らにたいめん仕り、御身此ちへ、御わたりを、はくさい王げきりん有、「みだひ所や兄弟を、たせいにて、うばい取、うしなはれ給ふ也。某も、共にしに、めいとこの御供、申べきか、此事

申上んため、今迄ながら候事、めんほくなく候」と、申もあへす、にわの石に、かうべを打つけ、我とむなしくなりにける、日らはゆめの心ちして、しゆふを引たてみ給へは、あけに成て、し、たりける。

「あいなき今のたいめんや、いましばしもながらへて、つまや子共かさいこのてい、こまくととは、かたらぬぞ、さぞやつま子のさいこの時、日らをうらみなきつら

ん」と、思へばくふひんやと、たをれふしてそ、なげかる、おつる泪ともる共に、我もめいとへいそかんと、其八月なればより、しよくしをと、め給ひつ、ゆをも水をものみ給はず、十月霜月はや過て、極月すへになりにけり。

みうち外様の者迄も、いろくきやうくん申せ共、少もしよくしを、まいらずして、たんだ」(十四才)よはりに、よはらるれば、みな涙をそなかしける。

か、る所へ、しやうとく太子、あまたのくぎやう、ともなひて、なんはのやかたへ、いらせ給ふ。

日「悦び、たいめん申、「てんせいくだつて人と也、身のせいこんもつぎぬれば、玉しい天にかへるとかや、此日らが玉しいは、天にかへらん望なし、あたこの山の、みねにして、岩のひつをさらせ候、其内へうぢよして、かぶとをまくら、よろひをしとね、刀のつをせうけんを、わきはさみ、ほこ長刀ヲそばたて、死、ても、しやうをたがへす、ぶつほう、せほう、わうほうの、てぎとなる者あらば、切はらはんと存る也、御心やすいかれ」と申ことばも、しだによはり、こゑもかすかになりゆけは、太子を初、おのゝも、あたらをしき命やと、みな涙をそながしける。

太子泪の内ながら、「日「左様になりゆかは、たれやの人をしと頼、がくもんをはきわむべき、はかなきつゆの命なり共、今しばしながらへて、学文せさせて給はれ」と、いなき付てそなげかる、

日「なみたともろ共に、「日「らにうぜう仕らは、かうらいのけいしを召れ、しゆしやくとうの、三つをまなび、つの国玉つくりを寺をたて、天わうし、がくを打、仏法さいしよの礼ちとなし、衆生をりやくおはしませ、此日らは、あたご山大こんげんとあらはれ、王城のけんご、あまねく衆生をまもり候。」もの、べのおこしがちやくし、もりやの大田とて、大あくぶとうの、あそもの有す、み出て申様「わがてうは、しん国なれば、神くは尤也、され共日、此国のまもりの神にならんとは、そらくしき、ゆいせき也。其上、太子に仏法をす、め申、玉つくり、寺を立させ申さん事、それは日本てうぶくの初なり。いかにと申に、きんめい十三年七月に、はくさいのせいめい玉、ぶつきやう、ぜんりつ、あま、はうし、ぶつし、ばんてうを、さしつかはず。そがのいなめ、仏をうやまひ、やまとに初て寺を立、いさひを以、仏をささみ」(十四ウ)

こうげんじとなつけ置、其年ききん、れきれいはやり、人馬ことくくし、たり、某かおやのもの、べのおこし、是ひとへに、仏のとがなりと、かのこうげんしを打やふり、仏をさきすて候。重て仏法、取立給は、いかなる悪事か出きなん、此もりや、あらんかざりは、又打やぶり候はん、人ぶつからかしに、御むよう」と、おこがましく申せしを、にくまぬ者こそなかりける。そがのいなめが子、そがのまご、そのぎに有けるか、つと出て申様、「さて

は其方、父もの、べか、仏学やぶりけるか、思へば、ぶつてき、おやのかたき、あますまし」ととんでかゝる、人々おさへて、たきとむる。

守「もりやこらへぬ、くせものにて、「すいさんなる、こしや原かな、出おのれ打ころし、ぶつほう心有やつ、見こりにせん」とこみ出る、され共、人へだたり、おしのけ引のけよせざりける。太子、御じやく年なれ共、御腹立ましくて、「につくきもりやか、あくごんかな、日「今は、かぎりのとこ、いやしくも、我等わうしにて、人をたすけんほうべんの、けちゑんなさんとする所に、とうざいをもは、からず、今のらうぜき、きつくわい也、あれ引たてよ、者共」と、承るとてももりやを取て、引たつる。もりや本より大力、四方へばつとふりたをし、こしの大たちひんぬいて、「日「らも人、われも人、たとへ天の御意なりとても、おつたてられては、かへるまし、仏といふ字は人をはらふとくなくれば、是なる人からはらはん」とて、日「らにきつてかゝる、人々引と、むれば、

「はなせく、ぜひ共きらん」との、しりける。

日「ちらは、じひの御まなこ、きかぬ、かほにて、おわします。せが太郎、とひおりて、もりやかいかるを取ておさへ、是ぞ天の、からたちしり、ふうしてそこにつきたをし、日「らの御前に畏て、御やくそく申ことく、ひほうのともがらを、かくのことくと、申上てとびされ共、本よりませうのわざなれば、座中のめには見へさりけり。もり(十五オ)〔挿絵 第十一図〕(十五ウ)〔挿絵 第十二図〕(十六オ)やはそのま、ごたいすくみ、はたらくものはめくち斗、後にはのふらん、しきりにて、扱もふしきの仕合かな、ほねはくたけて、し、むらは、はなれくに、なるやらん、あらくちをしやくくと、はかみをして、もたへける、すがたはちつ共はたらかず。

其時日「めをひらき、「仏法ひほうの輩は、たれもかくこそ候はめ、家ちにつれてゆき、かんびやうせよ」と、の給へば、下べ共は承り、家ちにごそは、つれ行けるを、にくまぬものこそなかりける。日「ら御悦び、かぎりなく、「いとま申てさらば」とて、こくうをまねかせ給へは、天ぐ共こしをかき、御むかいに参りける、りうぐうよりは、りうしん共、おくりと、けて、まいらんと、りうとうさ、げ、まいりける、そらよりは、天人まいさかり、ぶかくをそうしてまひ給ふ、おんがくともろ共に、あたご山へそへ上らる、正とく太子、其外の公卿大臣もろ共に、みねまでおくらせ給ひける。

日朝下よりお給ひて、い岩わやにいらんとし給へは、太子人々取付て、して師いのき多んつきせすは、又もや御目めにか、らんと、お各のく、たもとを、しはらる、日朝、「思定ひきためしうへ、今はなげくにおよばねは、いとま申て、さらばや」と、い入うでうのゆかにふし、お不こないすましておはします、かれたる木もあをやきて、い異きやうくんし、は花なぞふる

此は、敏だつ十三年、十二月日に、終にはせ給ひける、しやうとく太子は、名な残りをおし悲しみ、ひ悲たんのな涙んだ、もろ諸共に、立た立なく、かへらせ給ひける、日朝將將くんの御遠多ん行、き貴せん上下を押しなへて、み皆なを惜しまぬものこそなかりけり。

六たんめ

去程につ、むとすれと、此事の、よくねんのなつの比、は百くさい王へ聞へける、くきやう大臣、召あつめ、は百くさい王子を、大将にて、たせいを日本へ、さし遣わし、日朝がひやうしよを、ほりおこし、かいなきしかいを、取てかへり、は「(十六ウ)くさいの、ちまたにさらし、万みんのこらしめに仕れとのせんし也、承候とて、つかう其せい、十万よき、兵舟に打のつて、日本さしてそをしわたる、兵兵このうらよりくかに上り、山城の国、おたぎのこほり、あたこのふもとへ、よせたりける。

日朝の大將、せがい坊、大まさかりをふりかたけ、ふもとをさして下りければ、其外の天く共、りうくうかいのあしゆら共35、かれおとらしとくたりける。よせて此由、見るよりも、日本のやつはらか、ひぎやうのすかたに立出て、たふらかさんとはかるそや、あれ打とれやめんくと、互に時をつくりたて、入みたれ、爰三を三さいこと、た、かいける。

さすかにたけき、い天こくせい、天天ぐあしゆらが、ひしゆつにあい、みなことくく、引さかれ、かなふへき様なかりけり。

は百くさい王、御らんして、「此ち、いきは、しん国にて、神のいりきがつよく共、我國のいきふと、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000、1001、1002、1003、1004、1005、1006、1007、1008、1009、1010、1011、1012、1013、1014、1015、1016、1017、1018、1019、1020、1021、1022、1023、1024、1025、1026、1027、1028、1029、1030、1031、1032、1033、1034、1035、1036、1037、1038、1039、1040、1041、1042、1043、1044、1045、1046、1047、1048、1049、1050、1051、1052、1053、1054、1055、1056、1057、1058、1059、1060、1061、1062、1063、1064、1065、1066、1067、1068、1069、1070、1071、1072、1073、1074、1075、1076、1077、1078、1079、1080、1081、1082、1083、1084、1085、1086、1087、1088、1089、1090、1091、1092、1093、1094、1095、1096、1097、1098、1099、1100、1101、1102、1103、1104、1105、1106、1107、1108、1109、1110、1111、1112、1113、1114、1115、1116、1117、1118、1119、1120、1121、1122、1123、1124、1125、1126、1127、1128、1129、1130、1131、1132、1133、1134、1135、1136、1137、1138、1139、1140、1141、1142、1143、1144、1145、1146、1147、1148、1149、1150、1151、1152、1153、1154、1155、1156、1157、1158、1159、<

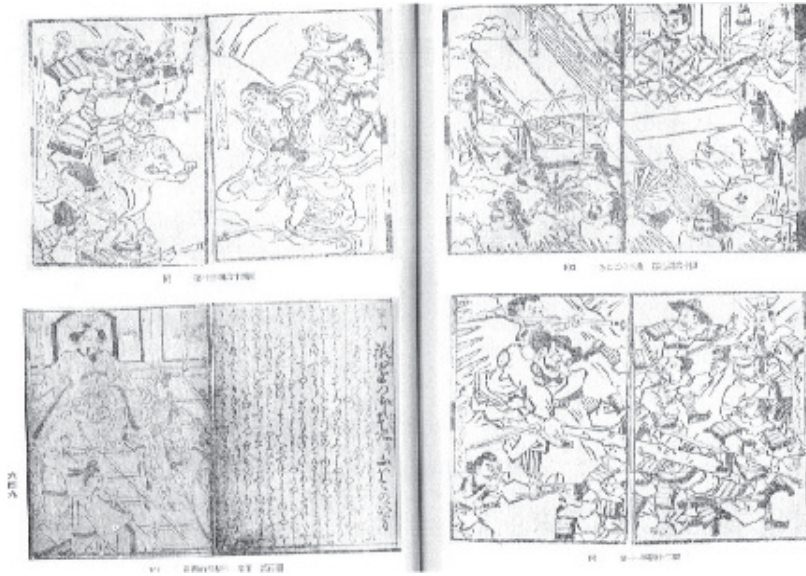
それより日日羅將將くん軍は、本ものつとかのに入い給たまふ、はひくくさいさいののぐん軍兵兵共共、ににげげてて国こへへそそ帰かける。
 其その後後、正正徳徳太太子子、ああたたののみみねねに、社社をを立たて、ここううけけををそそななへへ、ととううめめううのの、
 ひひかりりたたへへせせぬぬ、御御めめぐぐみみ、どど、のの軍軍ににかかつつりりああれれは、軍軍ににかかつつと、云云字字ををすすへへ、
 勝勝軍軍地地蔵蔵ごごんんげげんと、ああららははれれ給たまふふ、御御ししんん力力、いいののるるねねががいいののああららたた也也、とと、
 貴貴せんせん上上下下、おおししななへへて、みみななおおががままぬぬももののここそそななかりりけけり

右者太夫直之正本也

彦右衛門板

(十八ウ)

はん木や



『古浄瑠璃正本集成』五（角川書店、一九六六）より

- *1 拙稿「古浄瑠璃「あたごの本地」を読む」『京都精華大学紀要』五四、二〇二二年二月
- *2 服部幸造、美濃部重克、弓削繁編『月庵醒記』三弥井書店、二〇〇八年
- *3 岡本勝編『貴重古典叢刊 初期上方子供絵本集』角川書店、一九八二年
- *4 高野辰之『日本歌謡集成』巻七、東京堂、一九四二年
- *5 京都府亀岡市荒塚町、大堰川右岸の河岸段丘上の小丘。天正六年（一五七八）明智光秀が築城した亀山城（亀宝城）があった。
- *6 三重県亀山市。
- *7 朝日峯は愛宕の五峯のひとつ。
- *8 京都市右京区、保津川溪谷の出口付近東岸にある。紅葉の名所。
- *9 京都市右京区、大堰川支流の清滝川上流地域。南の高尾、槇尾とともに三尾といわれ、紅葉の景勝地。
- *10 大枝山。京都市西京区と亀岡市の境にある老坂峠の古名。
- *11 大堰川（桂川）中流の呼称。
- *12 兵庫県東部にある地名。次にある「暗がり峠」は本来、大阪府東大阪市と奈良県生駒市の境なので別である。
- *13 大阪府大阪市大正区三軒家。以下、難波、渡辺、神崎は淀川沿いの地名。
- *14 兵庫県尼崎市、神崎川河口から河尻に発達した港。能『船弁慶』の舞台。
- *15 大阪府和泉市、信太山の森。歌枕。
- *16 六甲山地に発し、兵庫県神戸市中心部を流れて大阪湾に注いでいた。福原新都や生田の森に近く、歌枕。
- *17 京都市東区、東山三十六峯のひとつ。もと山腹とふもとに阿弥陀堂があり、山頂に秀吉の墓がある。
- *18 鞍馬山の天狗伝承は有名。一般には能からとって鞍馬僧正坊と呼ばれる。
- *19 講義をする先生、あるいは経を講ずる僧のこと。
- *20 未詳。妙法山であれば那智三峯のひとつ、標高七四九メートル。山頂に釈迦堂があり、奥の院と呼ばれる。
- *21 大霊権現。熊野権現の異称。
- *22 続く天狗揃にも「むらくもほう（村雲坊）」が登場している。古浄瑠璃『天狗の内裏』、お伽草子『稚児今参り』などに「村雲坊」の名がみえ、室町期には天狗の名として定着していたらしい。

*24 *23 比興であればおもしろいこと。興あること。あるいは「秘密の行」「飛行の技」か。現在の福岡県大分県の県境にある英彦山。古くから霊場としてさかえた。能「鞍馬天狗」などには「彦山豊前坊」の名がみえる。「まづ御供の天狗は、誰々ぞ、筑紫には、彦山

豊前坊。四州には、白峰の相模坊、大山の伯耆坊。飯綱三郎富士太郎、大峰の前鬼が一党、葛城高間、よそまでもあるまじ。辺土においては比良、横川、如意が岳、我慢高雄の峰に住んで、人のためには愛宕山、霞とたなびき雲となつて月は鞍馬の僧正が谷に満ち満ち峰を動かし、嵐木枯滝の音、天狗倒しはおびたしや」

*25 未詳。大鳥山という地名は秋田県横手市(大鳥居山)、群馬県宇持村、奈良県橿原市(畝傍山の別称)、兵庫県揖保郡などにある。また那智妙法山から北へ向かうと大雲取越があり、昼間でも霧が湧くところから妖怪伝承がある。

*26 三重県尾鷲市八鬼山か。八木山とも書く。東方の九木峠を経て三木峠との中間に荒神堂があり、修験者の庵があった。門付芸のひとつ、ちよんがれ「紀州焼山順礼殺」の舞台という。

*27 未詳。付き人、護衛の意味か。「しゆう」と読めば衆、志友なども考えられる。刀杖剣(とうじょうけん)。刀杖は刀剣のたぐいという総称。あるいは刀小剣(とうしゅうけん)か。

*28 仏法に対して俗世一般の法、ならわし。
*29 大阪市天王寺区にある四天王寺。聖徳太子創建という。
*30 愛宕権現は愛宕社の祭神で、本地は勝軍地蔵とされる。愛宕に勝軍地蔵が祀られた時期は定かでないが、近藤謙氏は、十五世紀の内乱を経て戦勝祈願の神格として細川政元ら幕府中枢の信仰が篤かった勝軍地蔵を、古代から地蔵信仰の霊地であった愛宕が積極的に本地物として取り入れた可能性を指摘する(近藤「愛宕勝軍地蔵信仰の形成」『日本宗教文化史研究』一七、二〇一三年五月)。なお日羅を愛宕権現の前身とする説は林羅山

『本朝神社考』(一六三八〜四五年成立)に「愛宕山の神は日羅の霊なり」とみえ、駿府で家康と顕密の僧の会談に同席した羅山が、家康自身から愛宕権現は聖徳太子の師、日羅であるとの説を聞いたとする。慶長の役で捕虜となった朝鮮儒者兪沆の手記『看半録』にも、愛宕山権現は「新羅人日羅」であり、加藤清正らが崇敬するとしている。松本真輔「(シンポジウム)聖徳太子伝の日羅をめぐる諸説」『説話文学研究』五二、二〇一七年九月、拙稿「天狗信仰と文芸」『怪異学講義 王権・信仰・いとなみ』勉強出版、二〇二一年一〇月。

*32 奈良県高市郡明日香村にあった寺。欽明天皇十三年に百濟聖明王から献じられた仏像經典を蘇我稲目が安置し、日本最初の寺院とした。豊浦寺、小墾田寺ともいう。

*33 東西をわきまえず。分別なく、物事をわきまえないこと。
*34 「是害太郎」と是害坊天狗を親しんでよんだものか、それとも是害坊、太郎坊の二天狗をいうか。

*35 阿修羅は仏経を護る八部衆の一とも、帝釈天の敵対者ともされる。『法華経』法師功德品第十九に「諸阿修羅等 居住大海辺」とあり阿修羅は海に住むとされた。舞曲『大織冠』では龍宮から宝珠を盗んだ海女を阿修羅の軍勢が追う描写がある。

*36 生きた不動明王、あるいは不動明王のような人。狂言『蟹山伏』「こなたの事を世上で活不動じゃと申まする」。

*37 矜羯羅、制多迦は不動明王の脇侍。八大童子のうち、七、八。童形で金剛杵などをもつ。『是害房絵』では尋禪権僧正を守護し、是害房を撃退する存在としてあらわれる。能「善界」でも、不動、矜羯羅、制多迦、十二天が飯室僧正(尋禪)の祈りに応じて善界を撃退する。

*38 「手水」とすれば、水で身を清めて祈ったの意味か。あるいは「調ず」とすれば神仏に祈り邪気を調伏する意味。
*39 ここが勝敗、運命を決める大事だと。ここを先途と。『保元物語』中「爰を前途と防ぎけり」

*40 黄金札。鎧の札(さね)に金箔を置いたもの。
*41 中世の鎧の美称。
*42 永遠に変わらなず、滅びないこと。『妙法蓮華経』「如是我成仏已来甚大久遠。壽命無量阿僧祇劫常住不滅」

*43 六道にあつて、衆生を導く地蔵菩薩のこと、またその力。
*44 荒怠、荒類。生活や言動がなげやりになり、仕事を怠ること。